

諏訪の森周辺の史跡名勝探訪 ～「長崎歴史文化博物館」開館に寄せて～



長崎史談会会長
元長崎市助役

みやがわまさかず
宮川雅一

1. はじめに

今年の4月23日、水辺の森に長崎県美術館がオープンしたのに続き、11月3日には諏訪の森に長崎歴史文化博物館が開館する。新美術館が長崎港やその周辺の他の施設・景観と一体となって訪れる人々を楽しませているように、長崎奉行所立山役所の一部を復元した新博物館もその周辺に多く存在する史跡名勝と連携させることによって、来訪者の満足度を高め、リピートを促進すると思う。

そこで、以下に新博物館周辺の主な史跡名勝について、特に長崎奉行所との係わりに焦点を当てながら、その沿革や現状を紹介してみたい。幸い、長崎さるく博'06推進委員会において、すでに「西坂～諏訪の森界限」等のさるくコースが策定されているので、これらを参考に、新博物館で予備知識を得てから出発する様々な史跡探訪コース作りを提案したい。

市民・県民、そして観光客も楽しめる史跡巡りを実現するには、いうまでもなく適切な史跡巡回ルートの設定のほかに、園路や案内表示板の整備、ガイドブックの刊行、観光ボランティアへの周知などが必要である。この点、今後とも関係者のご理解、ご尽力



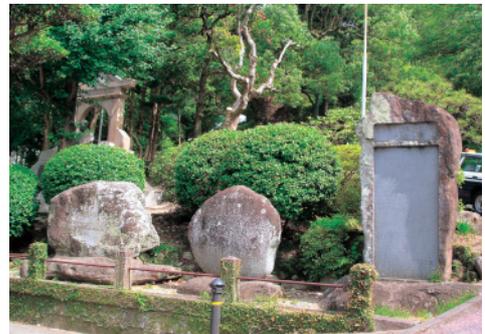
が望まれるところであり、本稿がそうした面で少しでもお役に立てればと思っている。

2. 長崎公園

明治7年（1874）内務省指令によって玉園山一帯に開設された、東京の日比谷公園と並ぶ古い公園である。明治維新までは、長崎奉行所立山役所に隣接して歴代将軍の位牌を祀る天台宗松嶽山安禅寺（東照宮）と諏訪神社宮司青木家の屋敷があった。これらの史跡に加え様々な記念碑、銅像・顕彰碑、文学碑等を、諏訪神社境内に至るまでに連続して数多く見ることができる。

（1）施福多（シーボルト）君記念碑とツェンペリー記念碑

まず、長崎公園入口に上っていく道路際に施福多君記念碑（写真右端）がある。これは、江戸時代、ドイツ人で蘭商館医として来日し、日本の近代化に貢献したシーボルト（1796～1866）の記念碑であり、明治12年（1879）に建立されたものである。その賛同者を記す隣の石碑（建施君記念碑題



シーボルト記念碑(右端)、ツェンペリー記念碑(左端)

名)には、有栖川宮熾仁親王、伏見宮嘉彰親王、三条実美、岩倉具視、吉田健康、金井俊行をはじめ時の中央・地元の顕官や全国医学関係者152名の氏名等が彫り込まれている。さらにその隣にはスウェーデン人で同じく蘭商館医のツェンペリー（1743～1828）の記念碑（渡来2百年記念）もある。これらについては、「施福多」とはシーボルトのことである、といった説明板が望まれる。

（2）安禅寺跡

現在の丸馬場周辺には東叡山寛永寺の末寺で正保2年（1645）に創建された松嶽山安禅寺がある。歴代徳川将軍の位牌が祀られていることから、歴代長崎奉行が頻りに参詣し、時に奉行居宅に使われることもあった。現在、明治にできた東照宮神社があるほか、葵の紋を刻んだ石門や奥庭園の庭石らしい石組みが残っている。再建された立山奉行所とともにぜひ訪れてみたいところであり、そのためにも、東照宮神社前の石段や郷土先賢紀功碑移転跡の



東照宮神社

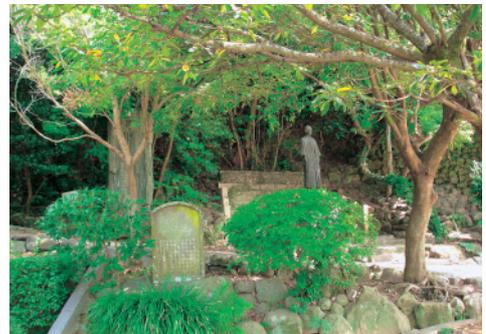
台座近くにある立入禁止区域などの整備が急がれる。

(3) グラント将軍手植えの榕樹（アコウの木）と記念碑

アメリカ合衆国第18代大統領グラント将軍（1822～85）は、明治12年（1879）に、わが国初の元首クラス国賓として夫妻で来日し、6月21日、長崎にその第一歩を印した。翌22日、丸馬場で開催中の博覧会を視察し、記念に夫妻でアコウの木を植樹した。その3代目の木と本人自筆の英文に和訳を加えた記念碑が丸馬場の一角にある。アメリカ人を案内すると大変喜ばれることであろう。



安禅寺跡（葵の紋を刻した石門）



グラント将軍記念碑とアコウの木

(4) 郷土先賢紀功碑

長崎の発展に功績のあった日本人79人とともに22人の外国人（うち中国人12人、西洋人10人）の名前を刻んだ顕彰碑で、大正5年（1916）長崎市小学校職員会が発起、市内有志者の賛助で建立された。毎年4月27日の長崎開港記念日に碑の前で先賢顕彰式が行われている。もとは東照宮神社下に残る台座にあったが戦後現地に移された。西洋人名の洋字は後述する古賀十二郎の筆跡である。郷土先賢として外国人も顕彰する長崎ならではの記念碑であり、英語や中国語入りの説明板を建てては如何であろうか。紀功碑にはないが郷土先賢として顕彰するにふさわしい長崎甚左衛門（開港時の長崎領主・1622没）の銅像が、十字架を胸にして近くに建っている。



郷土先賢紀功碑

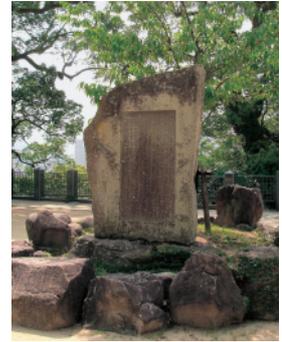
(5) 青木家屋敷跡

噴水のある池一帯が諏訪神社を再建した金重院青木賢清（1581～1656）の子孫が宮司として居住したところ。同屋敷の名残りとして、毎年正月に諏訪神社に献上していた早咲きの元日桜（旧暦の元日頃に開花する寒桜。3代目か）とそれを詠んだ池原香釋（1830～84）の長歌と短歌注1を刻む石碑がある。なお、この噴

注1 初春の むつきを時と さき匂ふ 花のころぞ うれしくありけり 香釋

水は、わが国近代公園噴水の第1号である。

また、その近くにある月見茶屋は、今は姿を消した呑江(港)茶屋とともに明治初年にできた休憩所で、明治39年(1906)に訪れた宮中御歌所所長の高崎正風(1836~1912)が名物「ぼたもち」の歌^{注2}を詠み、大正9年(1920)には在崎の斎藤茂吉(1882~1953)が吉井勇(1886~1960)の歓迎歌会を催している。なお、上記呑江(港)茶屋がフランス海軍士官で小説家のピエール・ロチ(本名ルイス・マリー・ジュリアン・ブイオ・1850~1923)作「お菊さん」の舞台となったことから、その跡近くにロチの記念碑が建立(昭和25年・1950)された。



池原香禪の歌碑



噴水のある池



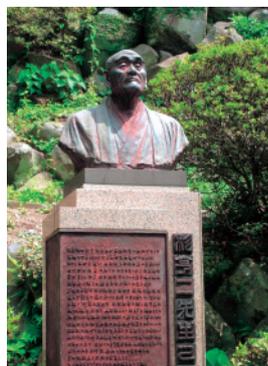
月見茶屋

(6) 近代文明先駆者達の銅像

わが国活版印刷術の祖・本木昌造(1824~92)、わが国統計学の祖・杉亨二(1828~1917)およびわが国写真術の祖・上野彦馬(1838~1904)の銅像が園内にある。いずれも全国に名を知られた人物だけに、誕生日や命日に新博物館とこれらを含



本木昌造の像



杉亨二の像



上野彦馬の像

注2 人心 ベタバタとして さりがたく 見ゆるやもちの ちからなるらん 正風

めた市内史跡巡りを企画すれば、関係者の来訪を十分に期待できよう。諏訪神社境内の福沢諭吉像についても同様。この他、初代商法会議所会頭で十八銀行創設者の一人である松田源五郎（1839～1901）、知事で雲仙を最初の国立公園に指定するのに尽力した西岡竹次郎（1890～1958）、国会議員で特に養殖漁業振興に功績のあった田口長次郎（1893～1979）等の銅像もある。

（7）その他の記念碑

剣道の山岡鉄舟（幕臣で明治天皇の侍従・1838～88）・籠手田安定（平戸藩士1840～1900）の「別格二君之碑」と柔道の西郷四郎（姿三四郎のモデル・1866～1922）碑（講道館師範嘉納治五郎の西郷追悼文を刻む）が元武道館の市立諏訪体育館の近くにあるほか、西南戦争後コレラで殉職した北島秀朝（1842～77）の「故長崎県令北島君之碑」や商船学校の祖・中村六三郎の紀功碑（揮毫は海軍大将伊東佑享、撰文は前島密）もある。丸馬場の忠魂碑は明治5年（1872）の建立で戦後再建された（題字は東郷平八郎）。このほか園内には、長崎奉行所支配勘定役で狂歌師の大田蜀山人（^{しよくさんじん}1749～1823）の詩碑や川柳作家の池田可宵（^{かしよう}1900～96）の去来・健吉を詠み込んだ句碑^{注3}、地元歌人で若山牧水の高弟中村三郎（1891～1922）の歌碑^{注4}、長崎文庫や盲啞学校の創設者・安中東来（^{とうらい}半三郎、1853～1921）の歌碑^{注5}などがある。

3. 県立長崎図書館

同図書館は、昭和16年（1941）創立の市立博物館や昭和40年（1965）建設の県立美術博物館の前身でもあるが、今般、同図書館郷土課管理の資料のうち明治時代以前の文献、地図・絵図、写真などが新博物館に移された。なかでも、長崎奉行所や明治時代の長崎県庁の公文書類は、新博物館の基幹となるものである。明治27年（1894）創立の長崎文庫を引き継ぎ、明治45年（1912）新橋町に設立された県立図書館が、当地にあった交親館（県会議事堂兼迎賓館）の建物を改造して移転してきたのは大正4年（1915）であった。当時の同図書館は博物館や講演会場・展覧会場の機能を兼ね備えた「文化センター」であった。

初代専任県立図書館長の永山時英（1867～1935）や、長崎学の基礎を築いた古賀十二郎（1879～1954）、長崎高商教授の武藤長蔵（1881～1942）やその後継者たちが近世

注3 月の出や 去来健吉 ここにあり 可宵

注4 川端に 牛と馬とが つながれて 牛と馬とが 風にふかる 三郎

注5 千金の 価の花も おしけなく 一輪つつを ちらす春風 東来

の長崎学を中心とした海外交流史等の研究に励み、資料の収集や発表にとどまらず、美術展、歌会などの文化活動にも積極的に取り組んだ（なお、同図書館の構内に古賀十二郎の記念碑がある）。内外有名人の来館も多く、これらの人物の署名や短文・挿絵が残る県立図書館芳名録は、それ自体長崎の歴史を刻む貴重な文化財である。

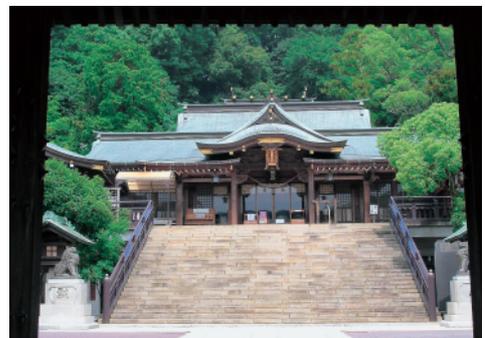
ここの取材から生れた文学作品は芥川龍之介、司馬遼太郎、遠藤周作、吉村昭をはじめ数限りない。また、これらの作品はもとより、地元長崎文学界の各種機関誌のバックナンバー、作品・原稿などの関係資料（市民・県民の寄贈品が多い）の集積・収蔵は、他に類を見ないものである。隣接する新博物館との連携を密にしつつ、文学館としての特色を持つ図書館として、これまでの歴史と伝統を継承していくことによって、今後とも内外から多くの人々の来館が期待できると考える。



古賀十二郎記念碑

4. 諏訪神社

諏訪、森崎、住吉の三所を祀る長崎の総産土神で、秋のくんちで全国に名を知られている。寛永2年（1625）金重院青木賢清によって後述の現松森神社の地に再興され、慶安元年（1648）現在地に移り玉園山神宮寺と称し、天和3年（1683）唯一神社となって今日に至っている。



諏訪神社本殿

境内には、本殿のほか、玉園稲荷神社、諏訪天満宮、フェートン号事件で引責自刃した長崎奉行松平図書頭康平（1761～1808）などを祀る祖霊社（康平社）等があり、坂の町長崎を象徴する73段の長坂は、テレビで全国中継される「くんち奉納踊り」の無料観覧席となる。同神社の「英文みくじ」はわが国はじめてのもので、外国人や学生などにも人気がある。



諏訪神社長坂

（1）五厘金碑

江戸時代、長崎の貿易商人らが利益の千分の五を公共目的に積み立てていたが、

その残金約6万円を本河内水源地建設に使った記念碑で、明治25年(1892)の建立。

(2) 迷い子知らせ石

明治時代に警察が建てた石碑。子供が迷子になると、この碑の左側の「たつぬるかた」に、迷子を見つけたら右側の「をしめるかた」にその子の年格好や連絡先等を書いた紙を貼り、身元確認につなげようとするもの。もとは馬町通りにあっただらしい。



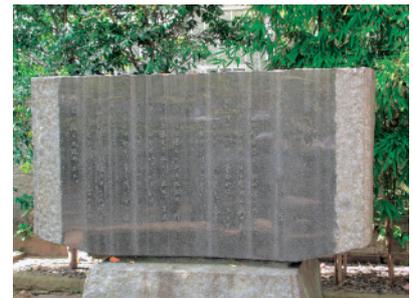
五厘金碑



迷い子知らせ石

(3) その他の文学碑・歌碑

長崎市出身で文化勲章を受章した文芸評論家山本健吉(1907~88)の文学碑「母郷行」の撰文は小説家井上靖で、昭和63年(1988)の建立。なお、その3年前、丸馬場のグラント將軍記念樹の近くに長崎生まれの小説家佐多稲子(1904~98)の文学碑「樹影」が建ち、両除幕式には二人が揃って帰郷出席した。



山本健吉文学碑(母郷行)

このほか向井去来^{注6}(1651~1704)、高浜虚子^{注7}(1874~1959)、種田山頭火^{注8}(1882~1940)、福田清人^{注9}(1904~95)、下村ひろし^{注10}(1904~86)といった俳人の句碑や大田蜀山人(前述)の歌碑^{注11}なども境内のあちこちで見ることができる。



佐多稲子文学碑(樹影)

(4) ^{まつもり}松森神社への道

前記諏訪神社長坂の下には、「踊馬場」という「くんち奉納踊り」が演じられる広場があり、その下の諏訪参道(坂段)は、長崎市街へ入る最も古い道で、殿^{との}

注6 たふとさを 京でかたるも 諏訪の月 去来

注7 年を経て 広がるのみの 夏木哉 子規

注8 大樟の そのやどり木の 赤い実 山頭火

注9 岬道 おくんち詣での 思い出も 清人

注10 龍踊や 社頭の秋日 捲込んで ひろし

注11 彦山の 上から出る 月はよか こんげん月は えっとなかばい 蜀山人

^{さまみち}様道と呼んで大村藩専用であった旧西山街道筋（炉粕町通り）と交差する。さらに下りて左に行く道（松森通り）が、江戸時代、流鏝馬が行われた場所。ここにマクドナルド顕彰之碑が立つ。嘉永元年（1848）、崇福寺末庵・大悲庵に、密入国者として幽閉されたアメリカ人のロナルド・マクドナルド（1824～94）が、オランダ通詞達に英語を教えたのがわが国英語教育の始まりで、平成6年（1994）にその記念碑が建立された。

明治6年（1873）ここ大悲庵跡は、国文学者で医師、政治・報道分野でも活躍した西道仙（1836～1913）の私塾「瓊林学館」となり、後にその名を引き継いだ料亭瓊林館ができた。ここで大正9年（1920）、前記永山・古賀・武藤の長崎学三羽鳥と齋藤茂吉が、蘭学者大槻玄沢（1757～1827）の孫大槻如電（1845～1931）と会食した。その際の集合写真と背景に写る木造建物が現存する。



旧料亭瓊林館（左手前がマクドナルド顕彰之碑）

5. ^{まつのもり}松森神社

菅原道真、その先祖天日穗命および父君菅原是善を祀る天満宮で、明暦2年（1656）、長崎奉行黒川与兵衛正直（1602～80）が今博多町から諏訪社移転跡の現在地に移したものである。延宝8年（1680）、長崎奉行牛込忠左衛門^{かつなり}勝登（1622～87）は社殿を整備し、境内の同根3株の松に因んでこれを「松森天満宮」と命名した。



松森神社

今に残る正門はそのとき同奉行の要請で中国の豪商^{きしえん}魏之琰（1617～89）が寄進したものの。

正徳3年（1713）、長崎奉行久松備後守定持（1659～1745）らが大改修を行ったが、社殿は当時の姿をほぼそのまま残している。本殿の「^{しよくにんづくし}職人尽」の彫物は県指定有形文化財であり、これを気に入った長崎奉行遠山左衛門^{かげみち}尉景晋（1752～1818）は、絵師に写させ江戸に持ち帰ったという。このほか同神社には久松奉行寄

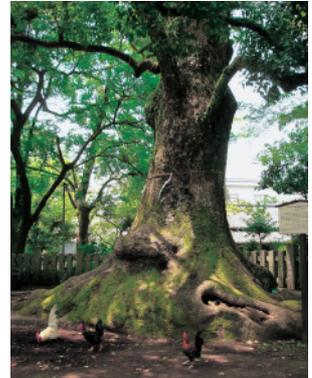


県指定有形文化財の「職人尽」

進の遠江守兼広作大太刀（4尺7寸・147cm）などの宝物が納められている。

また、クスノキ群（7本）は市指定天然記念物で、枝葉の繁る境内は夏も涼しく、大田蜀山人が日記で「長崎の涼しい場所第一」と太鼓判を押している。

かつてここに隣接し、奉行所管理の御薬園があったが、これは文化7年（1810）に十善寺郷から移ってきたものであり、海外渡来の薬草が栽培されていた。そこに祀られていた薬祖神（土造）が現在、松森神社老松殿に安置されていることから、市内の薬剤関係者によって年毎の例祭が続けられている。



市指定天然記念物のクスノキ

以上のように、松森神社は長崎奉行所と極めて深い関係にあり、しかも隣の料亭富貴楼ともども市内で江戸時代の姿・風情を最も色濃く残している場所として、奉行所を復元した新博物館と一緒に、是非、観光客に見て頂きたいところである。

6. 西山神社

松森神社上手の道路、前述の西山街道筋を東北方向に進むと、すぐ左手が西山神社の入口である。

同神社の前身は北極星や北斗七星を祀る妙見社で、享保4年（1719）長崎聖堂学頭るの盧草拙（1675～1729）が自宅に北辰・妙見の二神を祀る社殿を建立し、以後西山妙見と称されたが、明治維新の神仏分離令により、日本神話の造化三神を祀る西山神社と改称された（もっとも境内には妙見社の社殿も現存）。

草拙の先々代盧庄左衛門（在宅唐人盧君玉の子で内通事・1622～86）が寛文7年（1667）に「じゃがたら」の船主から貰った種を庭に植えたところ、8年後に実が成り、以後毎年初冬に大きなザボンが熟した。百年近く生きたが、盧氏宅類焼の際に枯れたという。同神社が「わが国ザボン発祥の地」とされているのは、このためである。また、ここでも前記長崎公園（青木家屋敷跡）と同様に、元日桜（市指定天然記念物）を観ることができる。

なお、長崎奉行所立山役所の水は、このあたり（西山郷）から引かれていたが、文化7年（1810）には、こ



ザボンの木



名水 椎の木の水

の境内の井戸から約730メートルの水樋が引かれ、さらに万延元年（1860）には、同井戸と椿原の水源とを接続する710メートルの水樋ができた。

7. おわりに

以上、新博物館周辺の史跡名勝を、隣接する長崎公園から東部方面にわたって、できるだけ奉行所との関連が深いものを中心に、かいつまんで紹介してみた。

このほか、逆に新博物館を出て西南方面に行くと、長崎駅に至るまでに、長崎奉行の役人や家臣の埋葬地とされた永昌寺（曹洞宗）、「キリシタンころび証文」の残る西勝寺（浄土真宗）、大雄宝殿ほか貴重な文化財の宝庫聖福寺（黄檗宗）、大楠のある観善寺（浄土真宗）、平和観音の立つ福濟寺（黄檗宗）、4人の長崎奉行の墓地などがある本蓮寺（日蓮宗）等の寺院が立ち並び、これらの境内やその近辺に、夏目漱石、北原白秋、佐佐木信綱などが足跡を残した迎陽亭跡、斎藤茂吉寓居跡・同歌碑^{注12}、吉井勇の歌碑^{注13}、市川団十郎供養塔等がある。

また南方面へ行くと、まず桜町小学校（元長崎代官屋敷跡）の1階にサント・ドミンゴ教会跡資料館（無料）があり、キリスト教時代から幕末までの長崎の重層する歴史を視覚的に実感できる。そこから10分も歩けば中島川で、眼鏡橋、桃溪橋などの石橋群や福沢諭吉ゆかりの光永寺（浄土真宗）、ビルの上の光雲寺（曹洞宗）、鮎の神事を伝える伊勢の宮辺りは絶好の散策路。

これらの石橋を渡って中通り商店街を横切ると、10分以内で様々な宗派の14寺院が立ち並ぶ寺町通りに行き着く。いずれも長崎奉行所立山役所ができた寛文11年（1671）頃ないしそれに先立って創建され、長崎奉行所と同時代の歴史を歩んできているだけに、長崎奉行や配下の町年寄、唐通事、オランダ通詞といった地役人の墓所をはじめ数多くのゆかりの史跡・文化財がみられるなど、これらもまた奉行所と深い関わりを持っていることが分かる。

新博物館の展示物等を見学したうえで上述の史跡・名勝を探訪・散策することによって、直に長崎の歴史に触れ、興味・理解が深まれば、長崎を再訪したいという人も増加するのではないだろうか。新博物館を拠点とする長崎観光の新たな魅力を構築するため、関係各位のご理解・ご指導・ご尽力を願いつつ、私自身、微力を尽くして参りたいと思っている。

注12 朝あけて 船より鳴れる 太笛の こだまはながし 並みよるふ山 茂吉

注13 長崎の 鶯はなく 今もなほ ジャガタラ文の お春あはれと 勇